

第12回

怪談「牡丹灯籠」を例に

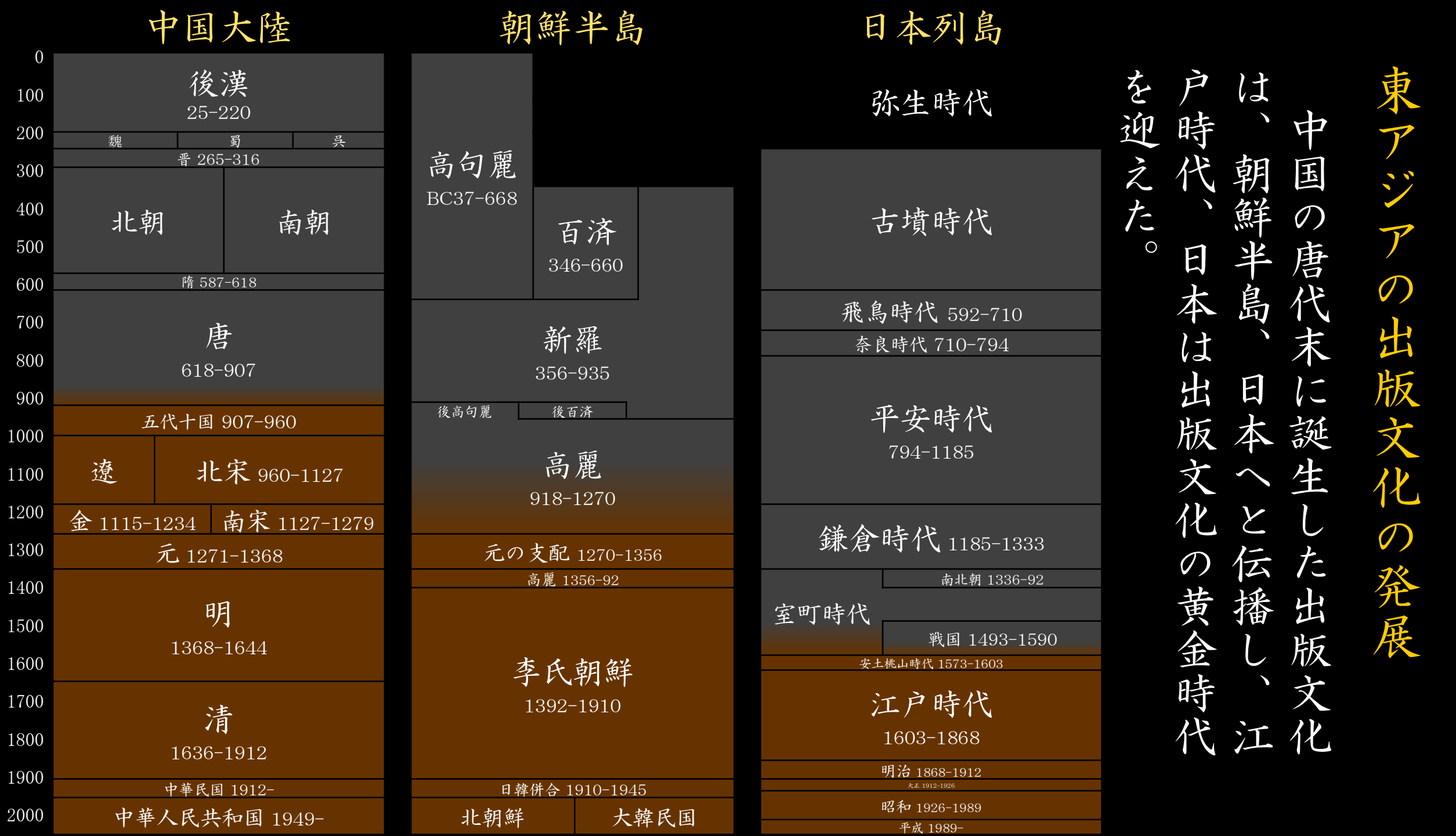
牡丹灯籠

ア

日本

性

奉^ごぜの七月は月よりいづれも亦^{また}何^{なん}やら六^む箇^こ五^ごのなるとうりぞく



日本の伝統芸能とアジア

中国では、明代、庶民文学の出版が黄金時代を迎えていた。

これらの文学作品は、江戸時代、日本に輸入され、翻刻されて広く読まれるとともに、日本の伝統芸能の発展にも大きな影響を与えた。

明代に出版された怪異小説集『剪灯新話』もその一つである。この中に収められた「牡丹灯記」は、日本を舞台とする怪談に翻案され、落語や歌舞伎の演目となり、日本三大怪談の一つ「牡丹灯籠」となった。





?

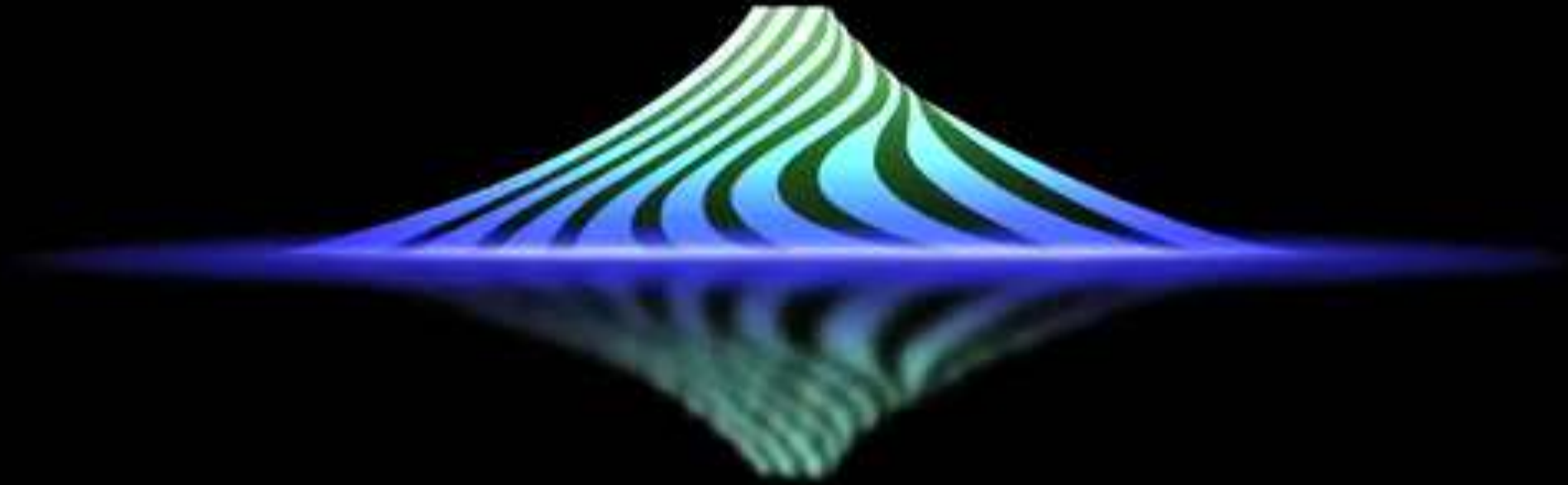
日本の三大怪談とは？

「牡丹灯籠」

「牡丹灯籠」は「四谷怪談」「番町皿屋敷」とともに、日本の三大怪談と呼ばれる。

今回の授業では、中国から輸入された怪奇小説が、どのようにして日本の伝統芸能の代表的な演目に発展したかを考えてみたい。





 **SHOCHIKU**

歌舞伎「怪談牡丹灯籠」(大西信行脚本)

牡丹灯籠の原話

「牡丹灯籠」の原話となったのは、明の瞿佑（一三四一〜一四二七）が著した怪異小説集『剪灯新話』*の中の「牡丹灯記」。

*『剪灯新話』は全四巻、二十一編の短編怪異小説を収める。



牡丹灯笼の原話

〔梗概〕

灯笼祭の夜、妻を亡くしたばかりの一人の男(喬生)が灯笼見物にも行かず門の前に立っていた。

真夜中を過ぎたころ、一人の娘が牡丹の花形の灯笼を提げた侍女に伴

われ、運やってくるのが見えた。

神魂飄蕩不能自抑乃尾之而去

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

〔梗概〕

男はその娘の美しさに心を奪われ、あとをつけていった。すると娘が突然振り向き「月明かりの下、あなたにお会いできたのも偶然ではございませんね」と微笑んだ。男が家に誘うと、娘はこばむようすもなく、男に手を引かれ、家の中に入った。そして、その夜二人は快樂の限りをつくした。

（明）瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

〔梗概〕

それから娘は侍女を伴い、每晚男の家に通ってくるようになった。

こうして半月が過ぎたころ、隣家の老人が男の家から毎夜話し声が聞こえてくるの不審に思い、家の中をのぞいてみた。すると男が灯火の下で髑髏とともにいるのが見えた。

（明）瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

〔梗概〕

翌朝、老人は男を訪ねて言った。
「お前と一緒にいるのは幽霊じゃ。
このままでは死んでしまうぞ」
男が娘とのいきさつを話すと、老
人は「その娘が住んでいるという所
を訪ねてみてはどうじゃ。何かわか
るはずじゃ」と言った。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯笼の原話

〔梗概〕

そこで男は娘がいう湖の畔へ行き、訪ね歩いたが、誰も知る人がいない。日が暮れたので近くにある寺を訪ね、境内を歩いていると、廊下のつきあたりには小さな部屋があった。部屋の中に、一つの棺が置かれ、その上にあゝの牡丹灯笼が懸けられていた。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

〔梗概〕

男はその夜、隣の老人の家に泊めてもらうことにした。その表情には恐怖の色がありありとしている。老人は玄妙観の魏法師に魔除けの御札を書いてもらってはどうかと勧めた。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

〔梗概〕

男は夜が明けると、玄妙観に行き、魏法師に助けを求めた。法師は朱で書いた御符を渡すと、一枚は家の門に、もう一枚は寝台に貼るようと言い、さらに娘の棺がある寺へは二度と行かぬようにと戒めた。

法師の言われたとおりにすると、娘は来なくなった。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記

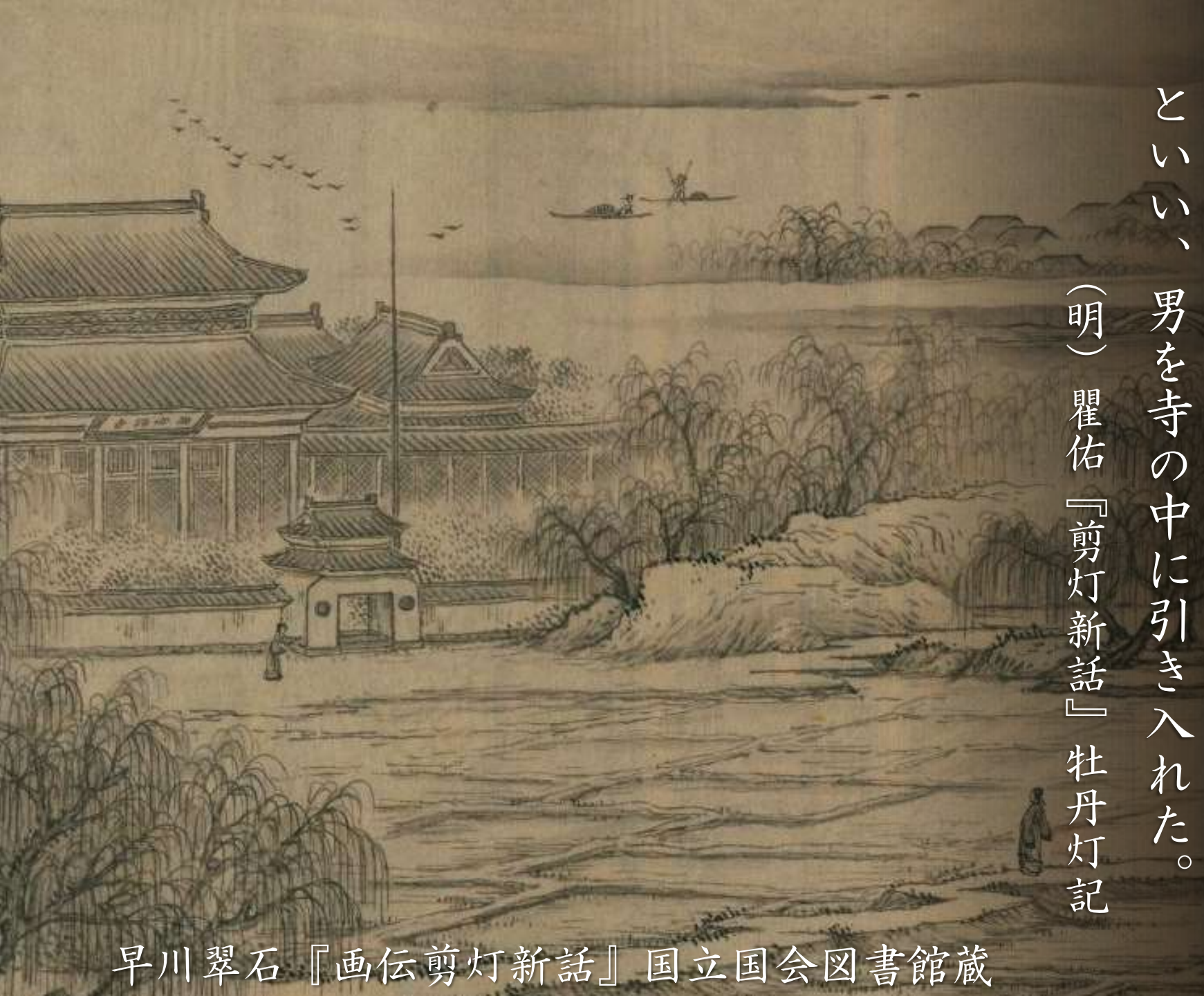


牡丹灯籠の原話

〔梗概〕

しばらくして、男は友人の家で酒を飲んだ帰りに、娘の棺のある寺の前を通った。すると門前にあの侍女が立っていた。「お嬢様はずっとお待ちだったのですよ。薄情ですね」といい、男を寺の中に引き入れた。

（明）瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

寺の中では娘が待っていた。娘は男を責めていった。

「あなたに身も心も捧げましたのに、どうして道士のいうことなど信じて私と別れようとするのです」

娘は男の手を握り、棺へと導いた。すると棺の蓋が開き、娘が男を抱いて中に入ると、蓋は閉まり、男は棺の中で息絶えた。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯笼の原話

隣家の老人は男の姿が見えないので、あちこち探し歩いた。もしやと思ひ娘の棺がある寺に行くと、棺の中から男の着物の裾がのぞいていた。寺の僧に頼んで棺を開けてもらうと、男は女の屍と抱き合って死んでいた。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



牡丹灯籠の原話

その後、闇夜などに一組の男女と牡丹灯籠を提げた侍女の姿が現れ、これを見たものは重い病に罹った。人々は怖れ、玄妙観の魏法師に訴えたが、法師はもはや自分の手には負えないと、四明山の山頂にいる鉄冠道人に救いを求めることにした。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記

牡丹灯籠の原話

鉄冠道人は山を下り、明州の西門の外に壇を設けた。護符を燃やすと、背丈一丈もある武者が現れ、男女と侍女を捕らえてきた。三人から供述をとると、武者に命じて退治させ、また山へ帰っていった。

(明) 瞿佑『剪灯新話』牡丹灯記



日本を舞台とする物語への翻案

明の瞿佑が著した『剪灯新話』は、十五世紀中ばには朝鮮に伝わり、一五五九年には林芭(임기)と尹春年(윤춘년)がこれに注釈を加えて『剪灯新話句解』を著した。

朝鮮で出版された『剪灯新話句

解』はやがて日本にも伝わり、多くの翻刻本が作られた。

後此運絶矣生獨居旅邸如喪配耦試期既迫亦無心入院惆悵而歸親黨問其故始具述之衆咸歎異生後終身不娶入鴈蕩山採藥陽嘉五代時僧願齊以爲天下名山鉛茅其間遂裁尚饗

牡丹燈記

方氏之據浙東也方氏名谷珍台州人永末起兵據每歲元夕正月元夕即於州張燈五夜福州府城府城士女以當時大城至正庚子之歲有喬生者居鎮城士女未識一笑入城再笑傾人國皆得絕觀高帝終樂史記至正庚子之歲有喬生者居鎮明嶺下不復出遊但倚門佇立而已初喪其親三更盡遊人漸稀見一丫雙頭牡丹燈前導一義人隨後約年十七八紅裙翠

日本を舞台とする物語への翻案

浅井了意は、京都二条本性寺の住職で、もとは武家の出身であった。

『剪灯新話』の中の「牡丹灯記」の物語を、京都を舞台とする武家の物語に改め、さらに難解な漢文を平易な仮名草子に改めたことで、「牡丹灯籠」という日本怪談の原型が誕生した。

登場人物						舞台	時代	
鉄冠道人	玄妙観魏法師	隣翁	金蓮	故奉化州判女符麗卿	喬生	明州(寧波)	元王朝 至正庚子年(一三六〇)	剪灯新話
	東寺の卿公	隣の翁	女の童	二階堂政宣息女彌子	荻原新之丞	京都	室町時代 天文戊申年(一五四八)	伽婢子

日本を舞台とする物語への翻案

浅井了意「牡丹灯籠」(『伽婢子』*卷三)

：：十五夜の夜いたくふけて、あそびあるく人も稀になり、物音もしずかなりけるに、ひとりの美人、その年廿ばかりとみゆるが、十四、五ばかりの女の童にうつくしき牡丹花灯籠もたせ、さしもゆるやかに打過る。芙蓉のまなじりあざやかに：

*『伽婢子』全十三卷、一六六六年(寛文六年)刊。浅井了意が中国の『剪灯新話』『剪燈余話』『集異志』などから翻案した短編怪異談六十七編を収める。

うれせううわわわわー
いゝあまはきもどあまにねむけ
あまよそひあうりねーろろ森
どうらあうかん海をどしぬぐすみの森にうけと
あそひあうりも人も稀になり、物音もあうりあり
うひとり乃あまその年廿ばかりとみゆるが、その
うり乃あまをうりうりしき牡丹花の灯籠を打過るに
しきゆりやうふあうりあまの夢のうりあうり

浅井了意「牡丹灯籠」(『伽婢子』卷三)

日本を舞台とする物語への翻案

『剪灯新話』の「牡丹灯記」は、江戸時代の読本作家にも影響を与えた。上田秋成はこの物語を岡山県吉備津神社の鳴釜神事とからめて『雨月物語』*「吉備津の釜」を著した。

*上田秋成『雨月物語』五卷九話。一七
あ七六年(安永五)年刊。

吉備津の釜

妒婦の害いふるも。老ての後を功と知ると。害これ何人の
害を。害いふる害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。
隣れ口は。害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。
國紙。害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。
さる人。害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。
と。害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。
さるなり。害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。
患。害いふるも。害いふるも。害いふるも。害いふるも。



上田秋成「吉備津の釜」(『雨月物語』卷二)

翻案怪談から落語人情噺へ

翻案怪談の「牡丹灯籠」を、長編の落語人情噺に改編したのが、幕末から明治にかけて活躍した落語家・三遊亭圓朝（一八三九～一九〇〇）である。

その口演は当時考案されたばかりの日本語速記術によって記録され、一八八四年（明治十七年）に三遊亭圓朝演され



版

三遊亭圓朝(1839-1900)

翻案怪談から落語人情噺へ

圓朝は、物語の舞台を江戸周辺に改め、主要な登場人物十八名からなる長編の落語人情噺に改編した。

登場人物													舞 台	時 代		
東寺の卿公	隣の翁	女の童	二階堂政宣息女彌子	萩原新之丞									京 都	室町時代 天文戊申年(一五四八)	伽婢子	
新幡随院の良石(高僧)	白翁堂勇斎(人相見)	米	露	萩原新三郎	峰(伴蔵の妻)	伴蔵	山本志丈(幫間医者)	徳(孝助の妻)	孝助	りえ(孝助の母)	黒川孝蔵(孝助の父)	国	飯嶋平左衛門(露の父)	相川新五兵衛(徳の父)	江戸時代 寛保三年(一七四三)〜 宝暦十一年(一七六一)	怪談牡丹灯籠
													江戸、栗橋、宇都宮			

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

飯嶋平左衛門は、刀屋の店先で酒乱の黒川孝藏に絡まれ、斬り殺してしまう。

この事件が発端となり、黒川孝蔵の息子であり、後に平左衛門の忠僕ともなった孝助の波乱に富んだ敵討ちの話が始まる。



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

平左衛門に斬られた黒川孝藏の息子・孝助は、父の仇とも知らず、飯嶋家の奉公人となる。平左衛門は気づくが、黙って孝助に剣術を教える。

飯嶋平左衛門

宮部源二郎

飯嶋の妾方國

忠僕孝助



三遊亭圓朝演述『怪談牡丹灯籠』

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

飯嶋家の奉公人となった孝助は、平左衛門の奥方が亡くなった後、妾となつたお国が、隣家の宮ノ部源二郎と密通していることに気づく。

飯嶋平左衛門

宮部源二郎

飯嶋の妾お国

忠僕孝助



三遊亭圓朝演述『怪談牡丹灯籠』

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

孝助はお国と密通を重ねる宮ノ部源二郎を討とうとして、誤って飯嶋平左衛門を槍で突いてしまう。平左衛門は自分は孝助の父の仇であると告白し、孝助を逃がす。



飯島義に依て
孝子の鋒先を
受後事を托せ

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

平左衛門は深手を負いながらも、宮ノ部源二郎を討ちに行くが、逆に殺されてしまう。源次郎とお国が逃げると、孝助は亡き主・平左衛門の仇を討つため二人の後を追う。

飯島平左衛門

宮部源二郎

飯島の妾お国

忠僕孝助



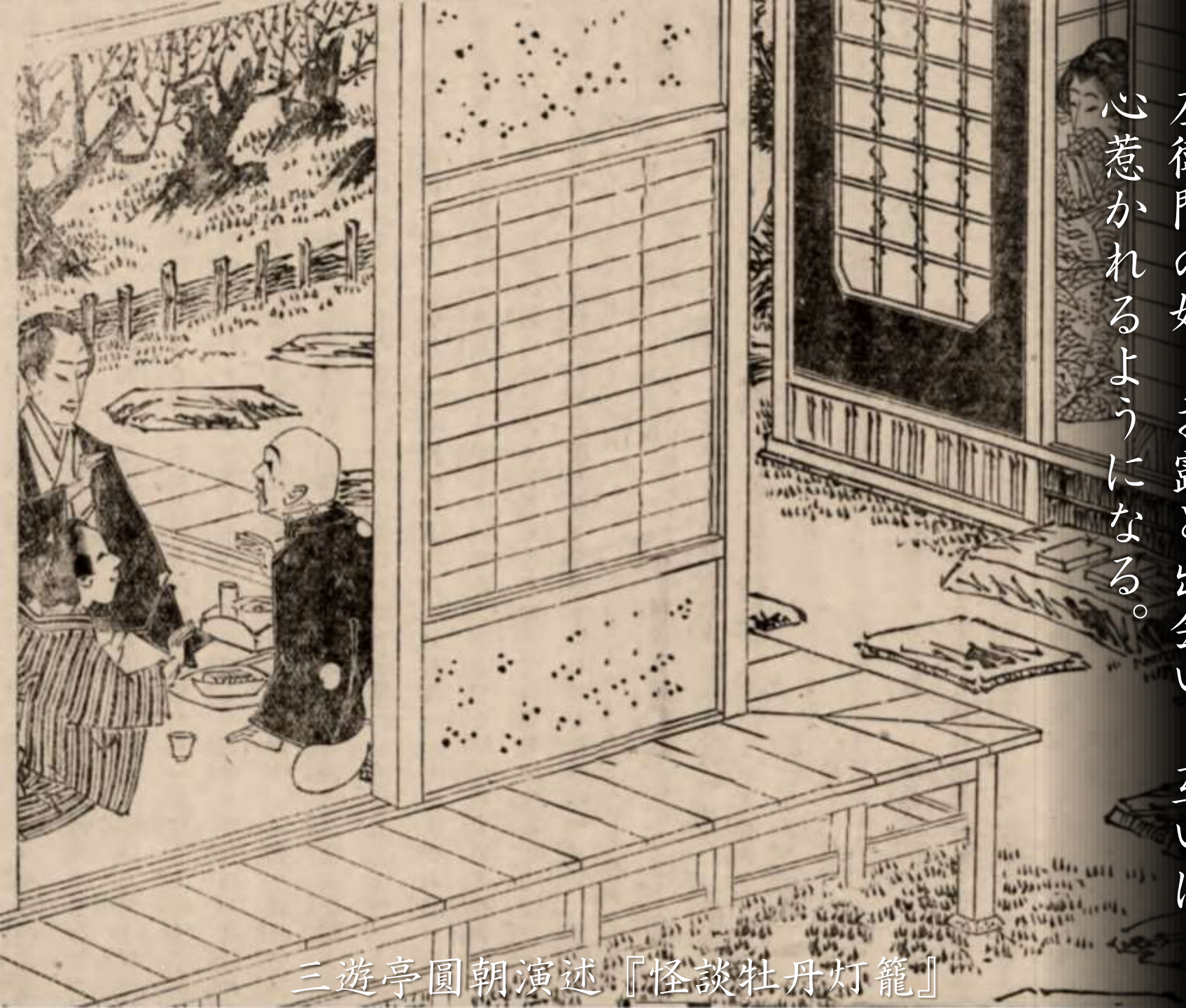
三遊亭圓朝演述『怪談牡丹灯籠』

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

孝助の敵討ちの話と並行して、牡丹灯籠の話が語られる。

根津（上野公園の西北）に萩原新三郎という美しい若侍がいた。新三郎は医者の子山本志丈の紹介で、飯嶋平左衛門の娘・お露と出会い、互いに心惹かれるようになる。



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

新三郎とお露の出会いを落語家はどうのように演じているのだろうか。

演じているのは、古今亭志ん生。

一八九〇年(明治二十三年)に生まれ、尋常小学校を中退後、奉公や朝鮮の印刷会社での勤務を経て、一九〇七年(明治四十年)に落語家となる。

天然の可笑しさを湛えた人柄と、軽妙洒脱な語り口は至芸と称えられ、一九五七〜六三年(昭和三十二〜三十八年)まで落語協会会長を務めた。



古今亭志ん生(1890-1973)



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

萩原新三郎は医者の山本志丈から、お露が自分を想うあまり亡くなり、お米もその看病疲れで死んだと聞く。ところが数日後、死んだはずのお露とお米が現れ、新三郎はお露と契りを結ぶ。



三遊亭圓朝演述『怪談牡丹灯籠』

孟蘭盆會に
新三郎幽鬼
と契る

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

萩原新三郎は人相見の白翁堂勇斎から死相が出ていると告げられ、お露が幽霊であることを知る。勇斎の勧めで新幡随院の良石和尚を訪ね、幽霊封じの御札と仏像を授かる。



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

幽霊封じの御札と仏像によって新三郎に近づくことができなかったお露とお米は、新三郎の身の回りの世話をする伴蔵に、御札をはがし、仏像を取り除くよう頼む。



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

伴蔵と妻のお峰は、百両と引き換えに仏像を別のものとすりかえ、幽霊封じの御札をはがす。お露とお米は新三郎の家に入り、新三郎を取り殺す。



三遊亭圓朝演述『怪談牡丹灯籠』

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

萩原新三郎の葬儀を済ませたのち、伴蔵と妻のお峰は、悪事が露見するのを恐れて、伴蔵の故郷・栗橋（現在の埼玉県久喜市）に居を移す。

お米の霊

お露の霊

萩原新三郎

栗橋無宿伴蔵

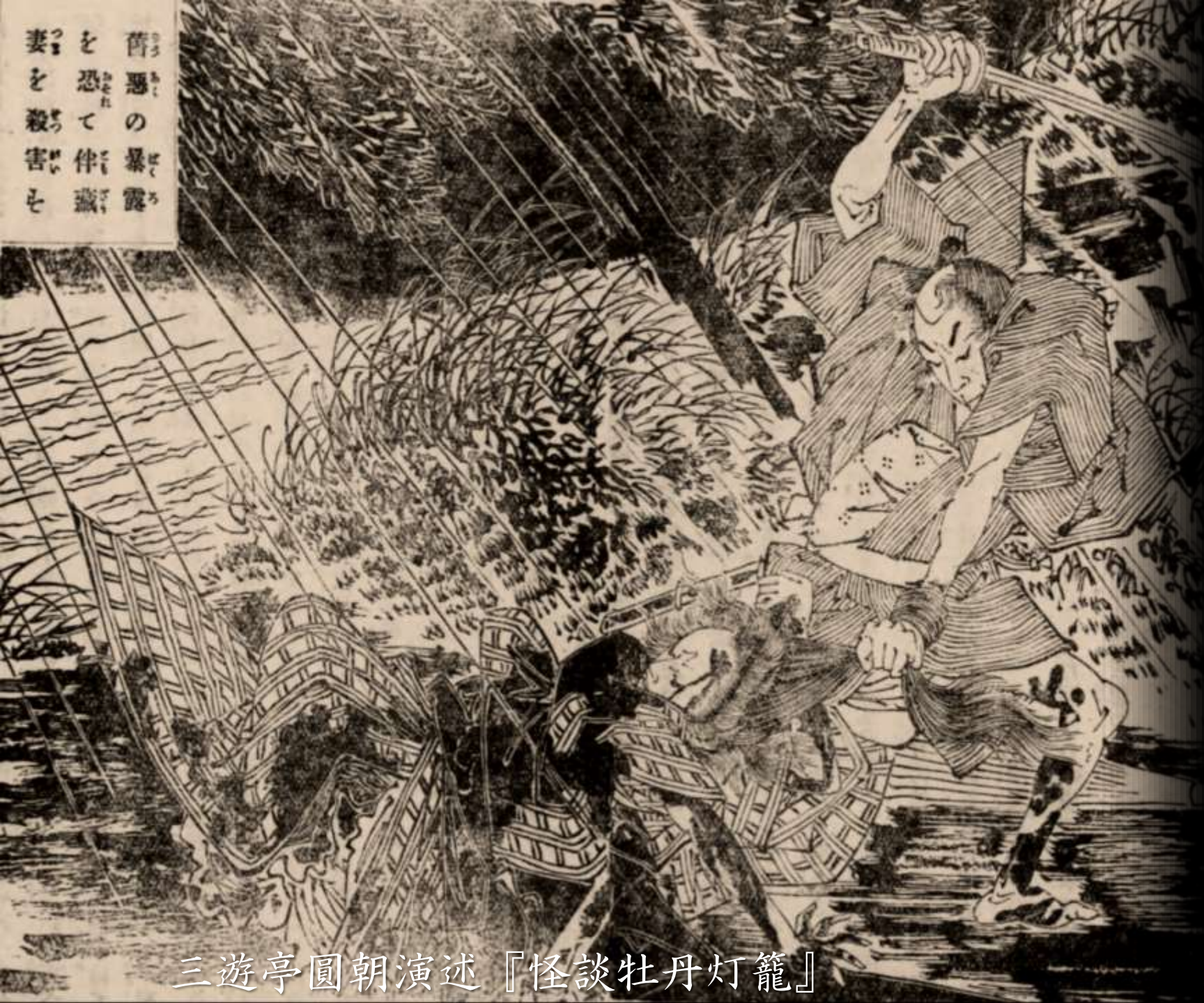
三遊亭圓朝演述『怪談牡丹灯籠』



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

伴蔵は百両を元手に商売を始めるが、やがて料理屋の酌婦となっていたお国と関係をもつ。怒った妻のお峰に罪を暴かれるのを恐れた伴蔵は、お峰を殺す。（「栗橋宿」）

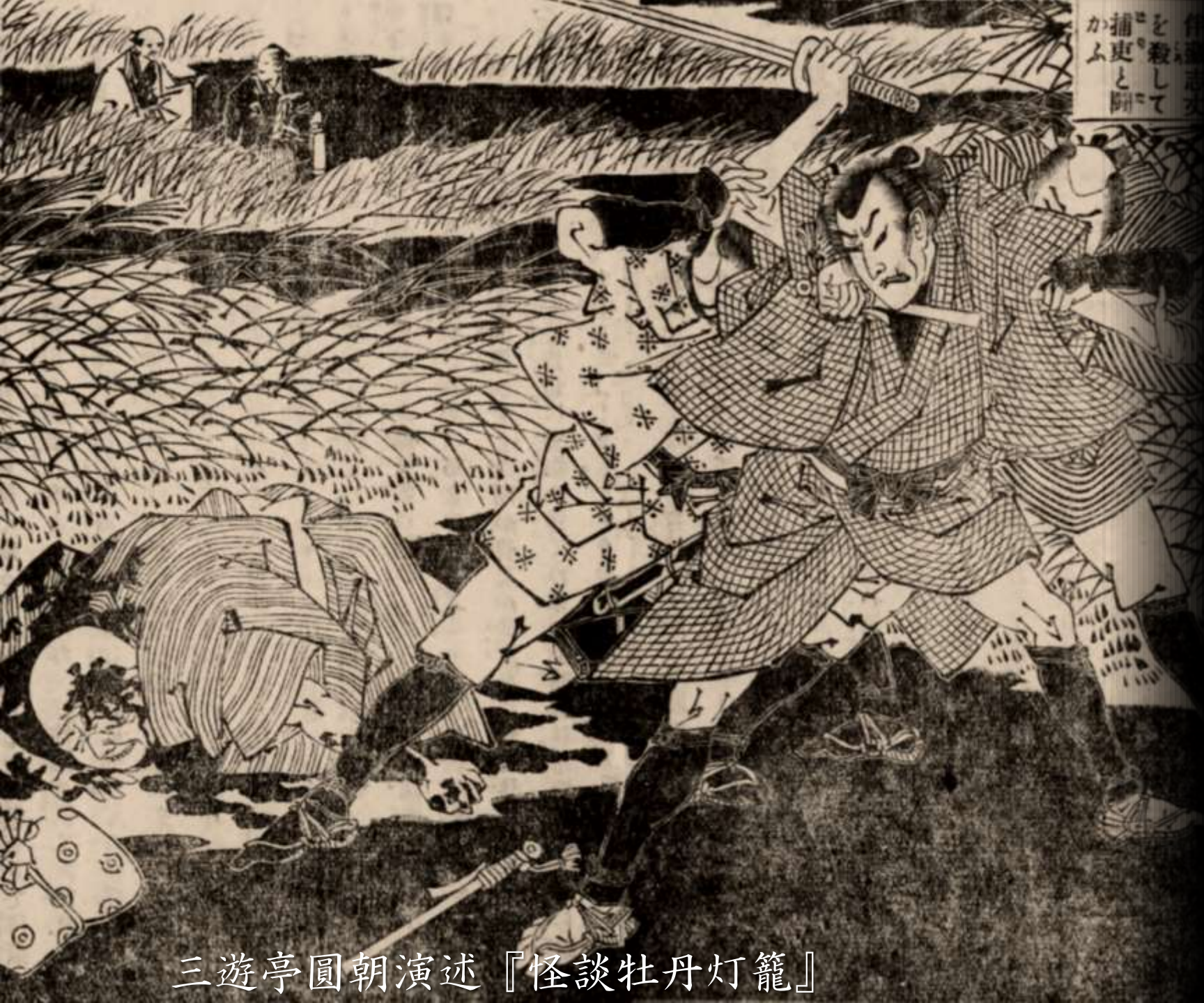


舊悪の暴露
を恐て伴蔵
妻を殺害す

落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

伴蔵は自分が犯した悪事を知った山本志丈も殺すが、たまたま通りかかった孝助に捕らえられ、捕吏に引き渡され、後日処刑される。



落語人情噺『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

孝助は主・飯嶋平左衛門の仇である宮ノ部源二郎とお国が宇都宮に隠れていることを知り、二人を殺して亡き主の仇を討つ。(大団円)

飯嶋平左衛門

宮部源二郎

飯島の妾お国

忠僕孝助



落語から歌舞伎へ

三遊亭圓朝の落語人情噺「怪談牡丹灯籠」は、一八九二年(明治二十年)、三代目河竹新七により『怪異談牡丹灯籠』の名で歌舞伎化され、五代目尾上菊五郎を主演として歌舞伎座で上演され、大当たりとなった。

近年では劇作家の大西信行(一九二九〜二〇一六)が脚本を書いた「怪談牡丹灯籠」が上演され、その新たな演出が話題となっている。



五代目尾上菊五郎(1844-1903)

歌舞伎『怪談牡丹灯籠』

〔梗概〕

お露とお米の幽霊から百両を受け取った伴蔵は、幽霊封じの御札をはがしにいく。お露とお米は新三郎の家に入り、新三郎を取り殺す。





まとめ

明代、中国では庶民的な文学作品の出版が黄金時代を迎えた。

これらの文学作品は、江戸時代、日本に輸入され、日本の伝統芸能に新たな素材を提供した。

日本三大怪談の一つ「牡丹灯籠」もその一つである。この怪談は、明の瞿佑（一三四一〜一四二七）が編んだ怪異小説集『剪灯新話』の中の「牡丹灯記」を原話とする。

江戸時代の初めには、この物語の舞台を日本に移した仮名草子『伽婢子』の「牡丹灯籠」が出版された。

明治時代になると、三遊亭圓朝がこれを落語の長編人情噺「怪談牡丹灯籠」に改編し、さらに三代目河竹新七によって『怪異談牡丹灯籠』の名で歌舞伎化され、日本の古典芸能の代表的演目の一つとなった。